

## 2-5 ヌートリア

### 【分布、生息環境、形態的特徴】

- 分布: 静岡県以西の本州に限られるが、香川県の小豆島には対岸の岡山県由来と思われる個体群が存在する [1] (図2-5)。戦後の一時期、国によって飼育が奨励され(畜産振興五カ年計画) [2] 北海道から九州まで全国38都道府県で飼育されていた経緯がある [3]。
- 生息環境: 河川や湖沼などの周辺。体の構造が水中・水上運動に適応しているため、水域がないと生息しにくい。また、冬期に長期間河原が凍結するような地域は生息に適さない。
- 形態的特徴: 成獣では、体重4~5kg程度が普通で、頭胴長50cm、尾長45cm程度 (写真2-5-1)。雌雄差は大きくない。毛色は全身茶褐色で、手足と尾の皮膚は黒い。尾の表面は細かい鱗で覆われる。足部には第1~第4指間に水掻きが発達する (写真2-5-2)。耳介は小さい(2.5cm程度)。切歯は前から見ると赤いが (写真2-5-3) これはエナメル質に鉄分が含まれるためと言われている。切歯と臼歯列の間に2枚目の唇が存在する (写真2-5-3)。



写真2-5-1 ヌートリアの体側面

撮影: 岡山理科大学理学部動物学科動物系統分類学・自然史研究室(小林秀司)

### 【基本生態】

- 食性: 純粋な草食性とされ、特殊化した消化管構造もそのことを裏付けるが [4]、日本では淡水二枚貝を摂食する例が散見される [5]。野生下では、水生植物や河岸植生を中心に摂食しているが、田畑にも出没して農作物に被害を与える。被害作物はイネだけでなく各種の野菜など50種に渡ることが報告されているが [6]、ピーマンやネギ類など独特のにおいがあるものは被害に遭いにくいようである。
- 繁殖: 一年中繁殖する周年繁殖であるが出産は春に多い。潜在的な繁殖能力は高いが [7]、古くから野生化・定着している岡山県では年間の捕獲数や農業被害金額は比較的安定しており、この約70年間、異常増殖した例は観察されていない。
- 行動特性: 性質は温和で、飼育するとよく人になれる。嗅覚は鋭い [8] が視力は貧弱であり [9] 体の正面の視野が欠けている [8]。行動面では、学習能力が高く状況に応じて行動をすぐ変化させ、特定の行動パターンに固執することがないため [10]、いわゆる飽きっぽい性格と考えられる。



図2-5 ヌートリアの分布図(環境省)



写真2-5-2  
ヌートリアの後足にある水掻き。第1指と第4指間にあり、第4指と第5指間にはない。

撮影:岡山理科大学理学部動物学科動物系統分類学・自然史研究室(小林秀司)



写真2-5-3  
健康診断中で麻酔下にあるヌートリア。切歯の前面が赤い。ヌートリアの口腔内には2番目の唇があり、しかも上下ではなく、左右から合わさる仕組みになっている。

撮影:岡山理科大学理学部動物学科動物系統分類学・自然史研究室(小林秀司)

## 【被害の概要、特徴】

ヌートリアによる被害は、ほぼ農業被害に限局され、他の生態系被害などの事例は国内では知られていない。農業被害は用水路周辺の田畑で被害が大きい。水田では田植え直後の苗が被害にあう(写真2-5-4)ほか、出穂時期に食害されることが多い。また、夏季には休憩場所を作る目的でかなりの面積の稲を倒伏させることがある(写真2-5-5)。畑地ではさまざまな作物が被害を受けるが、ピーマンやネギ類など独特のにおいがあるものは比較的被害に遭いにくい[6]。ただし近年は管理者の不在や高齢化により、用水路やため池堤体に穴を開けられる被害が出始めている(写真2-5-6)。



写真2-5-4  
ヌートリアの摂食被害に遭った苗。侵入経路に近い位置から摂食していくことが多い。

撮影:岡山理科大学理学部動物学科動物系統分類学・自然史研究室(小林秀司)



写真2-5-5  
ヌートリアによるイネの倒伏被害。おもに夏期、休憩場所を作るためにこうした被害を引き起こす。



写真2-5-6  
ヌートリアによる掘削が遠因となり引き起こされたため池堤体の部分崩落。岡山市北区横井上にある小幸田奥池にて(2018年の西日本豪雨災害時)。堤体内側の管理が不十分で藪化したためヌートリアを呼び込む形になってしまった。

撮影:横井上町内会 小谷氏・斉藤氏

## 【被害対策(被害対策に役立つポイント)など】

### 侵入防止柵(写真2-5-7)

被害防止の手段として一般には侵入防止柵が設置されることが多いが、設置方法により効果は大きく異なる[10]。ヌートリアは侵入防止柵に到達すると柵の周囲を慎重に確かめ、まず噛み破れそうな場所がないか探索し、それが見つからないと柵の上端に手をかけて柵の引き倒しを試みる(動画1)。したがって、侵入防止柵として最も重要な点はまず噛み破れない材質を用いることであり(防鳥ネットなどは簡単に噛み破る)、次に柵の引き倒しがおきないようにしっかりした支柱を設置することである。柵の引き倒しに失敗すると今度は強引に柵の下を潜り抜けようとする(動画2)。したがって柵の下を抜けられないよう、ヌートリア側から見て柵の下端を手前に15cm程度折り曲げておくのがよい(写真2-5-7)。柵の引き倒しも潜り抜けもできないことが分かると、ヌートリアは今度は柵を乗り越えようとする。この時、柵がヌートリアの頭胴長よりも高いと一定の侵入防止効果があり、

高さ70cmの柵はほぼ突破されることはない(動画3)。またヌートリアの行動特性、すなわち学習能力が高いわりに面倒くさがりで飽きっぽいという性格を利用すると防除効果が高くなる。たとえば、侵入防止柵の上端15cm程度を支柱に固定せずにおくとよじ登ろうと柵に両手をかけて体重をかけたときに柵が一気に折れ曲がって最終的には落下してしまう(写真2-5-8)。すると落下の危険性を即座に学習して、よじ登ることをあきらめるようになる。また、圃場への侵入経路に迂回しなければならないような障害物をいくつか設置するなど、二重三重にちょっとした嫌がらせを講じておくとたとえ一つ一つに万全の効果がなくとも侵入をあきらめることが多い。



写真2-5-7

ヌートリアの侵入防止柵。柵板の下端を侵入側に折り曲げて柵の下を掘削できないようにしているところがポイント。右の写真では足跡がつきやすいように折り曲げた部分に砂をまいている。

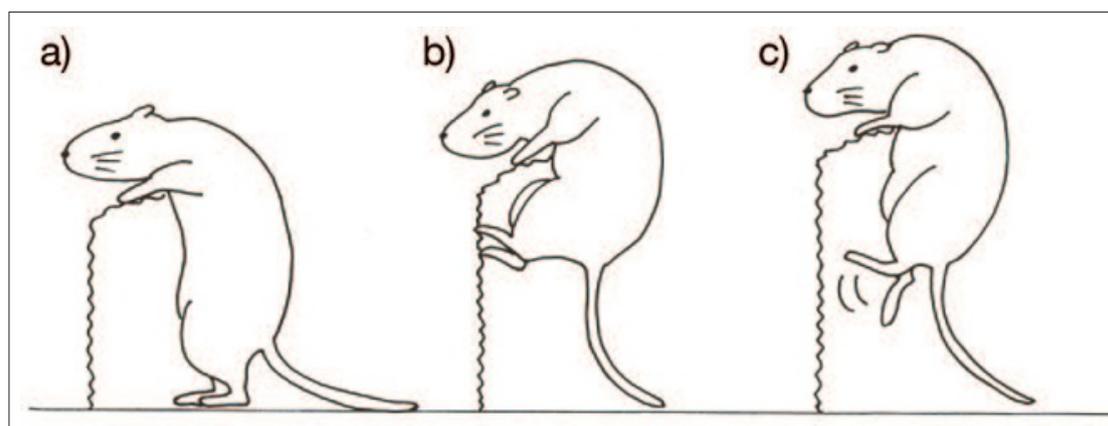


写真2-5-8

侵入防止柵設置時の工夫の一例。柵板上端を15cmほど固定せずにおくとよい。非固定部分が10cm程度だと足が柵板に届いてしまい(b)、踏ん張ることができるので、非固定部分の長さが重要である[10]。

作画:岡山理科大学理学部動物学科動物系統分類学・自然史研究室 柳原綾佳

## 捕獲

捕獲そのものは野生動物一般の水準から見るときわめて容易で市販のかごワナににんじんなどの餌を入れておくだけで良い。捕獲後は、かごワナごと衣装ケースのような筐体に入れ二酸化炭素を内部にゆっくり供給(20ℓ/分)することで、約20分程度で暴れることなく意識低下により安楽死が可能である(岡山県2012)。ただし、一斉捕獲などで大規模に駆除しても持続効果は極めて薄い。岡山県の例では2年間で約5000頭を駆除したが、効果は半年も持たない地域が大半であった。この事は、裏を返せば、植えたばかりの稲の苗の食害を防ぎたいといった、時間的に限局された条件下ならば、捕獲の効果が十分見込めるということでもある。



動画1\_柵の引き倒し



動画2\_柵の潜り抜け



動画3\_柵の登攀失敗